〇松本 茜 氏（平成 15 年（当時 14 歳）、兄を交通事故で失う）

［要旨］

兄の事故

私には兄が２人おりました。家は北海道にあり、家族５人で幸せに暮らしていました。13 年前の平成 15 年、交通事故で当時高校１年生の次兄を亡くしました。私は中学２年生でした。事故は２月の最も寒い時期で、新聞配達のアルバイトに向かう途中、自転車で車道を左側走行していた兄は、飲酒運転の車に後ろからはねられました。早朝、警察から連絡を受け、両親と私の３人で病院に向かいましたが、着いたときには兄はもうすでに亡くなっていました。

母はその場で倒れ、父は死亡手続き等でその場を離れてしまい、私は一人恐怖と寒さで震えが止まらない中、刑事さんの話を聞くことになりました。今回の事故がひき逃げ事件で、加害者はまだ捕まっていないという事実を告げられました。そのときすぐには怒りや悲しみは全くなく、ただ、悪夢であってほしいと、そればかり考えていました。

兄の遺影は、両親の代わりに私が選びました。私の両親は火葬場には行っていません。「自分の子供の骨は拾えない、ごめんね。」と、何度も謝っていました。そのときに、両親の代わりに、私と長兄はきちんと次兄の最後を見届けなくてはならないのだと覚悟しました。霊柩車に乗って火葬場に行った経験は、14 歳の私にとって、とてもつらい経験でした。それでも両親を責める気持ちにはなりません。葬儀が終わっても、母親は兄のセーターを握りしめて泣き続ける日々でした。その後、飲酒運転厳罰化を求める活動を通して、同じ気持ちを分かり合える仲間たちとの出会いがあり、支えがあり生きています。

事故後の学校生活、理解してもらえない苦しみ

兄を失ってから、中学校での生活というのは体験したことのない苦痛に溢れていました。友人から名前を呼ばれることさえストレスでした。事故のことはニュースで放送され、地元の新聞にも大きく扱われました。私の家族に関する情報すべてが他人に知られることになりました。毎日炊き続けるお線香の臭いが制服に染みつき、学校の廊下で人とすれ違うたびに「線香臭い」と言われ、私は日に日に精神を病んでいきました。親には相談できず、学校の養護の先生を頼りました。先生はとても親身になってくれる人で、私に PTSD の症状を教えてくれたのもその先生でした。

しかし、学年の先生は、体が健康な私が保健室に通うことをよく思いませんでした。勉強を頑張っている生徒に悪影響で、私が保健室学習をすることは不平等であると言われました。先生がおっしゃっていることは理解できましたし、私を気遣ってくださっていることもすごく伝わってきていました。でも、先生たちのそうした気持ちに応えたいと思う反面、「兄の分までお前が頑張らなければいけない」という励ましの言葉は、私を一番苦しめました。15 歳の私には、自分が今後どうなりたい

か、どうしていきたいかという意思があるのに、周りの大人にそれを上手く伝えることができず、何度も歯がゆい思いをしました。

時が経っても、悲しみは襲ってくる

私は兄を失ったと同時に、何気ない幸せな日々だけでなく、もう一つ失ったものがあります。それは、母です。母は現在生きています。端から見たら何の問題もない家族なのですが、私には、昔の母に戻ることはないということだけは分かります。私は２年前結婚式を挙げました。その際、夫の家族が、きょうだい揃って家族写真を撮っている姿を見て、胸が締めつけられるような寂しさを覚えました。幸せをつかみ、祝福されているはずなのに、お祝いの席でさえそうした心情、悲しみが突然襲ってくるのです。両親は、私の結婚式に参列することがどんなにかつらかっただろう、そんなことばかりが頭をよぎりました。

披露宴の最後、母は涙を流して言いました。「茜の結婚式なのに、拓(亡くなった兄)がいないのが寂しい。」そんな瞬間も懸命に涙をこらえます。それでも、私は母を責める気持ちにはなりません。家族を失ったきょうだいが受ける影響というのは、こうした何気ない日常も、おめでたい日も、楽しい瞬間にもいつでも迫ってきます。

私は、大学を卒業して就職するまでは親元で暮らしていました。いつ自ら命を絶ってもおかしくない状態の母を守らなければいけないという思いで、必死に生きてきました。むしろ生きてくることができました。ですが、私は今、新たに家庭を持って親から離れて暮らしていて、実は時が経った今が一番しんどい状況です。こうした時間差で悲しみと戦わなければいけないということを、この歳になって知りました。